
先輩。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩。

【Nコード】

N6168R

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

7月の初旬。外は暑いけど、店の中は冷房がよく効いていて涼しい。

待ち合わせたのは駅の側のカフェで、正面に座る先輩は熱いコーヒーをブラックで、私は氷の浮かんだアイスコーヒーにガムシロップを入れた。

イライラして、必要以上にストローでかき混ぜながら先輩を見るが、彼は在らぬ方向を見ている。別にこの後どうするって予定は決まっていないうし、まだそんな話まで進んでないし、けど、先輩の態度でそ

んな気はとっくに失せてしまってる。
「先輩、聞いてますか？」

(前書き)

今後の布石。

「I l d o n c v i e . . .」のシリーズの短編。2、3年前の話です。

7月の初旬。外は暑いけど、店の中は冷房がよく効いていて涼しい。待ち合わせたのは駅の側のカフェで、正面に座る先輩は熱いコーヒーをブラックで、私は氷の浮かんだアイスコーヒーにガムシロップを入れた。

イライラして、必要以上にストローでかき混ぜながら先輩を見るが、彼は在らぬ方向を見ている。別にこの後どうするって予定は決まってるじゃないし、まだそんな話まで進んでないし、けど、先輩の態度でそんな気はとつくに失せてしまってる。

「先輩、聞いてますか？」

コーヒー片手に沈黙したままの先輩に、改めて声をかけた。

私は今までずーっと彼に話をしていたつもりだったが、相手はそうではないらしい。

でも、それは今に始まった事じゃない。ずっとそうだ。

「悪い、聞いてなかった。」

今の今までどこも見ていなかった目が私を捉え、口ではそう謝っている。

でもきつと本当は『悪い』なんて思ってなんかない。

「先輩は・・・いえ、いいです。」

言ってしまうと、きつと全てが終わってしまう言葉を押さえ込み、小さくなった氷が浮かぶ薄く水っぽいアイスコーヒーで飲み下した。

* * * * *

先輩は有名な人だった。

近くの大きな病院の息子で、学業優秀、眉目秀麗・・・は言い過ぎかもしれないけど、背が高く格好良くて、絵も上手くって、何かのポスターコンクールで賞を貰って全校集会の時に表彰されていた

し、バスケット部の練習にはみんなで押しかけていた。

もちろん私、吉井遥香も例に洩れず、先輩に憧れていた。

高校に入っただけで、一目惚れだった。

きっかけは廊下ですれ違っただけ。

正面から向かって来る、友人とふざけながら歩いている先輩に釘付けになった。

単純？ でもそうなんだから仕方がない。

でも、そんな素敵な人には当然のように彼女がいて・・・私だけでなくみんな、ただキーカーキヤーと騒いでいただけだった。

うん、それはそれで楽しかった。本当はライバルのはずなのに仲間意識？

姿を見かけただけでドキドキしたり、部活の練習をみんなで見守って、よく邪魔だってマネージャーの人や、他の部員の人に追い出されたり・・・ファンクラブって感じのノリだったのかな？

2年になると、受験生になった先輩は勉強に集中するために、バスケット部を止めてしまい、確実に姿を見られる場所が無くなってしまった。

・・・それから、彼女と別れたって情報が私達の中で流れた。

確かに同級生の彼女と一緒にいる姿を見かける事はなくなり、これは本当に別れたのかもしれないって、みんな浮き足立った。

「遥香も告白してみたなら？」

窓の外に先輩の姿を見つけて、騒いでいたら友達の実里絵が肩に手を置いて言った。

何人かが当たって砕け散った後の事だ。

「・・・何で？」

「見るだけで楽しい？ 玉砕覚悟で行ってみたら？」

『好き』って言葉はやっぱり自分で伝えたかったから書きたくなくて、勢いで書くと果たし状みたいになりそう、来て下さいってのもありがちになって・・・。

結局、ちよつと妙な手紙になったけど、それが功を奏したのか先輩は放課後に体育館の裏に来てくれた。

たぶん、「好きです付き合ってください。」って言ったと思う。ガチガチに緊張してて、それくらいしか思いつかなかったと思うし、先輩の返事で全部飛んじゃったからよく覚えてない。

「いいよ。」

って、先輩の口から出たその言葉が信じられなかった。

昨日からの私の中のシミュレーションでは、確かにそんな言葉を書いて描いていた。

でも、

実現するとは思っていなかった。真里絵の言うように玉砕を覚悟してこの場に来たから。「ごめん」って言われたら、何て言って先輩から離れようかとか、泣かないようにしようとか、そんな事しか考えてなかった。

「どした？」

呆然として固まってしまった私の頭に、ポンポンと先輩の手が触れた。

「真理子・・・どうしよう、先輩が・・・」

「ん、振られた？」

ふわふわした状態で教室に戻り、私が戻ってくるのを待っていてくれ

た真理子に思わず縋りついた。告白に行く前は「頑張つて来ーい」と送り出してもくれた。

今は慰める気マンマンの彼女に、思いつきり首を横に振った。

「いいよって、返事くれて・・・アドレス交換して、今から一緒に帰ろうって。」

「は？」

「信じられないのは重々承知です。私も信じられません。」

真里絵は急に笑い出して・・・落ち着くと。

「良かったね。」

つて抱きしめてくれた。

一緒にバスケット部の練習を見て、一緒に先輩の話をしていた人達とは、疎遠になって・・・時々ちよつと痛い視線を感じるけど、でも私は幸せだった。

しばらくは舞い上がった状態で・・・帰りは先輩と一緒に帰ったりしたけど、今考えるとあんまり彼女って感じがしなかった。私は男の人と付き合うのは初めてで、どうしていいかわからなかったし、先輩はいつも何となく疲れてる感じがした。

「帰ると家庭教師付けられて、みっちり勉強。」

「絵描いていたいけど、医大に行かなきゃいけない。」

「学校が休憩場所。」

「親がうるさい。」

・・・とか、先輩はそんな事をばやいてた。羨ましいような環境にある人でも、それはそれで色々苦労があるんだなって、頑張ってる先輩がすごいなって、その時は思ってた。

一度、お昼にうっかり隣で寝ちゃった先輩に・・・つい出来心でほつぺたにキスしたら、ぱちって目が開いて・・・本格的なキスをされた。

それくらいかな？ うん、とりあえずは。

先輩は見事医大に合格した。

3月になり先輩は卒業しちゃって・・・今度は私の番だ。

本格的に勉強をしなきゃいけない前に、無理を言っただてに誘った。

「先輩、水族館行きませんか？」

古くなって新しく建て直したばかりの電車で3つ向こうの水族館に電話をして誘ってみた。大学が忙しいのか、先輩からは連絡をくれない。

「いいよ、いつがいい？」

けど先輩は、あっさり快諾してくれる。

・・・だったら本当は先輩から連絡が欲しい。

デートでは彼女なんだって気分をしつかり味わえた。

少し日差しが強くなった頃、先輩は黒い開襟のシャツの長い袖を捲って、微笑む姿が眩しかった。きちんとエスコートしてくれる姿は格好良くて、素敵なお店で食事して、大学での話も少ししてくれた。

けど、絶対に時々違う事考えてる。

「遥香、デートどうだった？」

月曜に真里絵に聞かれた。

「うん、水族館きれいだったよ。水槽おっきくて、魚ってあんなに

きれいだと思わなかったよ。」

「へー、私もそのうち行きたいな。」

「うん、お薦めだよ。お昼もさ素敵なお店に連れてってもらっちゃった。ランチだけどフレンチレストランなんて初めてだった。」

「次元が違うね……。それで先輩はどうだった？」

「……。あ、うん。格好良いよね……。本当。私でいいのかな？先輩がこつちを見てくれないのは、私じゃ不満だからなのかな？」

私本当に先輩の彼女なのかな？

目頭がふいに熱くなった。

「遥香？」

「ごめん、目にゴミ入っちゃったかな？ ちょっと痒くなっちゃった。」

慌てて擦って、涙を誤魔化した。

何となく最初からそんな気がしていた。

やさしいけど、受身で、彼氏んだけど、彼女を見てない。

縁が切れてしまわない程度に連絡を入れて、私も勉強に身を入れた。

悔しかったから。

先輩とは進みたい道が違うし、そこまでのレベルでもないから、同じ大学へ追いかけて行くこうなんて思いもしなかったけど、あまり遠くには行きたくなかったし、一つ上のレベルの大学に行けるようになって。

春になって希望の大学に通い始めると、自分のペースが掴めるまではバタバタした。

同じ授業を取ってる人と仲良くなったり、もっと新しい友達作るためにサークルに入ったり。先輩も去年はこうだったのかなって、そこだけは納得した。

* - - * - - * - - * - - * - - *

一度大きく深呼吸をして、もう一度ストローを銜^{くわ}えてコーヒを一気に吸い込んだ。水つばいけど、その分冷たくてカキ氷を食べた時みたいにキーンと頭に響いた。

でもそのおかげで、大きな声を出さずに済んだ。

「先輩、久し振りですねって、いつもこの言葉から始まるの嫌なんですけど？・・・って言ったんです。」

「悪い。今俺、家で揉めてて・・・。」

先輩は無造作に頭を搔いて申し訳なさそうな顔してるけど、今に始まった事じゃ無い。気付いてからもう何ヶ月？先輩が卒業してからは確実にそうだ。

「私から連絡しないと、全然連絡してくれませんかよね？」

「んー、お前がくれるからな。」

何それ安心？私はずっとイライラしてるのに、そんな言葉を事も無げに言ってくれる先輩にムカツときた。

「...そうですか。」

わかりました。

当分っていうか、先輩から連絡してくれるまで絶対に連絡入れないから！

こうなったら持久戦覚悟よ！！

「私帰ります。」

「そう、何か用事あるのか？」

「・・・はい、これから真里絵に会ってきます。」

これから連絡入れて、都合が合えば思いっきり愚痴聞いてもらう。

「そっか、」

・・・それだけ？ 引き止めたりしてくれないんですね。

『私達、本当に付き合ってるんですか？』

飲み込んだ言葉がお腹の中で、毒でも出してるみたいだ。
胃の辺りが重たくて、苦しい。

「じゃあ先輩、また、」

「ああ、気をつけてな。」

気をつけてって、そんな気遣いができるなら他の事気遣ってよ！

店を出るなり携帯を取り出して、真里絵の携帯に電話した。

「もしもし、真里絵？ ごめん今時間ある？・・・」

あの男は、私の事なんかきつとどうでもいいんだ！

だって、興味があればもっと私の事気にしてくれるはずよね？

・・・私は今まで何やってたんだろう？

でも、このままじゃ悔しくて振る事もできないんだから！！

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

今回きつとチエック甘いので、おかしな所があったらごめんなさい。

先輩はもちろん芳彰です。

彼の心情と、持久戦の遥香の逆襲が描けるのは、いつになるのか・

まだそこまで辿り着いていないので。

まず、「親友ともう一步」の2章目仕上げて、その後最低4本書いて・・・それからくらい？

ちなみに遥香は、「いつの間にか切れた」と

「大人になるまでに。」の5部目で芳彰に表現されてる子です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168r/>

先輩。

2011年4月11日23時39分発行